

x 体験の研究 (I)

江戸時代の宗教思想
——比較思想の立場から見て——

米 沢 弘

The Studies in x -experience (I)

Religious Thought in Tokugawa Period
——from the Viewpoint of Comparative Thought——

Hiroshi YONEZAWA

The author considers in this paper religious and spiritual experiences in the depths of the human mind. This paper, which is intended to be the first installment of my planned series on x -experience, will discuss the characteristics of Japanese religious consciousness in the Tokugawa Period (1603—1867).

Chapter I treats of the influences of Christianity during the period of “*sakoku*” (national isolation).

Chapter II and chapter III, are the analyses of the unique religious thought of Zen Master Bankei (盤珪禪師) and of the birth and founding of the Konko-kyo Sect (金光教).

The analyses are conducted on the basis of comparative thought. An investigation was made, also on that basis, into the process of transfer of religious experiences through the medium of ordinary language.

は じ め に

x 体験という必ずしも聞きなれない言葉を用いたが、それは E. フロムの使用法にならったものである。

フロムは晩年の著書 “You Shall Be As Gods” の中で、 x 体験について述べている。それは宗教的経験に神観念が必要かという問題と関連し、いわゆる宗教体験とよばれるものは、有神論的にも、非有神論的 (nontheistic) にも、無神論的 (atheistic) にも、また場合によっては反有神論的 (antitheistic) にも観念

化できるとし、その違いは、経験を観念化する際に出てくる違いと考える。

そしてその際に、この種の体験を表わす適当な言葉が西欧語にはなく、religious ではあいまいであり、spiritual では誤解されるおそれがある、そのために x 体験という言葉の使用を提案した。(巻末引用文献参照)

このことは、明治以降に、より一般的な意味を持たされた日本語の宗教という言葉、また霊的とか精神的と言った言葉を考えた時に、日本語の場合に、より一層要請されることで、その意味で x 体験という言葉を私自身、従来

から使用することとしている。

ところで私たちは何かを見る時に、N.R.ハンソンの指摘するごとく、何かを何かとして見る (seeing as...) ように、 x 体験の場合も或る個人についての深層体験も含む体験の総体が x 体験として体験されるわけで、そこには何等かの有機性とも言える構造化が行なわれるわけである。

フロム自身は自己の立場を、非有神論的神秘主義とよんでいるが、宗教体験とか深層体験といったよりも、誤解のない意味で、そのためにはより広い意味で x 体験という言葉を用いることについて、はじめに共通理解を得ておくこととしたい。

本稿においては、世界史的にも比較思想の立場で興味のある江戸時代における、有神論の立場と非有神論の立場の二つの信仰体系について、非有神論の立場としては盤珪禪師について、有神論の立場としては、幕末に創唱された金光教について考えてみることにする、なおはじめに、江戸時代における、切支丹の影響と切支丹思想の変容についてのべておくこととしよう。

I-1 『和論語』

ここに一冊の不思議な書物がある。

それは『和論語』とよばれる宗教的教訓書で、最初の出版は寛文9年(1669年)であり、石門心学のテキストとしても広く用いられ、しばしば版を重ねた。(注1)

その不思議さというのは、もしかするとここには、あの弾圧のきびしかった切支丹の影響がかくされているのではないか、また著者はそれをあえて加えたのではないかということである。

この著書の選者は、神・仏・儒を尊びという三教一致の立場だが、神の中にあえて切支丹の見方をしのばせたとも考えられる。

『徳川時代の宗教』(“Tokugawa Religion”)の著者Robert N. Bellahは、その著書の中

で、日本の神概念の説明の際に、いくつかを『和論語』から引用しているが、それ等はほん訳の関係もあって、ヘブライ的な神観念に近く感ぜられる。(注2)

『和論語』ははじめに「神明部」として、さまざまな神社の神託を列記するが、その中には聖書の表現に近いものがある。

『和論語の研究』の著者勝部真長氏の指摘するように、たとえば春日大明神の神託

「たとへばもろもろの人つねに清き室をかまへ、国土の珍物を供し、七重のしめをはり、数百日心をくるしめて我をいのるとも、その心邪にけんどんならん家にはいたるまじ。たとえば重服のふかき家にも、慈悲つねにあらんその室には、まねかずといふともかならず影向あるべし。我つねに慈悲を神体とするが故なり……、もろもろの人よ、善神は法味をもてちからとするがゆへに、よろづのくだくだ敷物の供物をこのまず」

また諏訪大明神の神託

「たとへば人いけるをくらひ、おもきしむらをも食とも、つねに正直の智水すまば、我常に心を通し、一切尊神に告て、天にあげ地にさげてそのおもひをおもひのごとくならしめん、たとへば千日の清めにしめをひき、内外清浄して、神明を祈るとも、邪なる所には至らじ。」

また愛宕大権現の神託

「衆生つねに世界の火をけがし、をのれ一人のおもひをふくみ、天にさかひ地にそむかんものは、われつねに火乱神をつかはし、その不浄をやきほろぼさん。上はゆたかに下くるしまん時は、火の雨を殿舎にふらし、上財をちらし苦しみのものにあたへん。」

これらのいくつかの引用から、福音的勧告やヘブライ的な神観念を連想することは、必ずしも不自然ではないだろう。

さらに同氏によれば、『和論語』の仮託の選者に、どうして切支丹の同情者と目されている清原枝賢、細川藤孝、木下長嘯子を列記す

るのか、それも島原の乱から三十年しかたっていない時点であれば、一層のことであろう。

この指摘は興味のあるものだが、そこには自然発生的以上の何かが感ぜられるとしても、それを確認しようのないことは残念である。もっとも、それ故に『和論語』は禁教下でも刊行されつづけたわけであろう。

江戸時代という、世界史上かつてない、鎖国によりとぎされた時代に、どのように神道、仏教、キリスト教が熟成されて行ったかは、比較思想の立場から極めて興味のある問題である。

江戸時代末期、当時の日本を可能なかぎり視察して廻った英国公使オールコックは、日本人にとって、プロテスタントの抽象的教義よりは、ローマ・カトリックの信仰の方が受け入れられやすいのではないかと述べるとともに、仏教なり、儒教なりが、日本人の精神という蒸留器を通ずることにより、時代がたつにつれて、何がつけ加えられ、またどのような修正なり変革なりが行なわれているのかはわからないとするのは鋭い指摘である。

今回はこの種の問題の中から比較思想の立場で興味ある二つの例を、具体的に考えてみることにしよう。

I-2 『^(天地始)天地始之事』

では一体、弾圧された切支丹の信仰はどのように変って行ったか、それを示す興味のある記録は、長崎県西彼杵半島の黒崎地方にひそかに伝承された『^(天地始)天地始之事』である。(注3)

これは、切支丹史の研究家として知られる田北耕也氏によって昭和のはじめに紹介されたもので、伝来された世界観が、とぎされた状況の中で、どのように変って行ったかが示されている。

その内容は、『旧約聖書』の「創世記」のはじめの部分と洪水伝説に関する部分、また新約の「福音書」と「黙示録」に相当する部分が主となっているが、その中に現われる地理

的環境は、当時の切支丹の生活圏に移しかえられ、また物語り風の叙述となっている。

今回はその中から、洪水の部分だけを引用しておこう。

「段々人多くなるにしたがい、みな、ぬすみならない、慾をはなれず、悪にかたぶく。次第に悪事つるゆへ、でうすこれをあわれみたまいてばっぱ丸じといふ帝王に御告ぞ有けり。『此寺の獅子駒の目、あかいろになるときは津波にて、世は滅亡』との御告をかふむり、帝王は日ごとに寺ゑまいる。手習子どもあつまりみて『いかがにて獅子駒を拝する哉』といゑば、脇方子どもきいて『獅子の目あかいろになる時は、此世界は波にて滅亡する。』わきの子どもきいて、わらいていふやうは『さてもおかしき事、ぬりたら、すぐに赤くなるが滅亡はおもいもよらぬ。』とぬりけり。

ばっぱ丸じ、いつものとおり参詣し、獅子の目のあかきを見て、はっとおどろき、かねて用意の刳船に六人の子供をのせ、兄壱人は足よわくゆへ、残念ながらのこしをく。かかる所にあいだもなく、大波天地をおどろかし、片時の間に、ただ一面の大海にぞなりけり。

右の獅子駒海の上をはしり、のりおくれたる壱人の兄、背におふてぞたすける。其汐三時にさっとひき、ありおふ島にぞ、やすらい居る。然る所に、おくれし兄を、獅子のせおふてきたりけり、波におぼれて死たる数万の人々、べんぼうといふ所、前界の地獄、此所へおちける。

刳船にのり命をつぎし七人のものどもは、其島を住所と定むといへども、夫婦の極なくゆへ、女は眉をおろし歯に鉄漿付る事、此時よりはじめ也。又次第に弥増人間うまれて死するもの、ことごとく、みなべんぼうにぞ落ちける。」

この洪水についての叙述は、この地方の地理的条件を前提として受容されているが、さらに注目されることは、洪水の予兆が人為的になされろと言うことで、人為を包括した自

然の立場である。たとえば中国の六朝時代の『述異記』における、石亀の眼が朱に塗られることが町が陥没して湖となる予兆であるといった説話と同工異曲であり、それがすでにこのあたりに民話として伝承されていたとしても、興味のある問題である。

『天地始之事』の中で最も美しい記述は、キリストの生誕についての竹取物語風とも言える叙述であり、終末についての叙述も興味のあるもので、それらを原型と比較することにより、ひそかに伝承されるうちに、どのような変形をうけたかが示される。

今回、洪水伝承についてのみ引用したのは、実は洪水伝承と文化のタイプとは極めてよく対応することで、それを一つの指標として文化のタイプを考えることが可能である。

この切支丹の伝承は別として、南西諸島をのぞき、日本の場合は、古代エジプトとともに、破壊的洪水の伝承のなかった文化圏で、中国の治水伝説の影響は受けながらも、ハム的な文化と共通するものが感ぜられる。(この点については別のところで述べたので、参考文献について見られたい。(注4))

セム的なキリスト教が日本に定着しにくいのも、またそれが日本の変容をうけるのも、この種の基底的な文化の構造と関係し、より直接的には言語の問題として、日本語のシステムの中にセム的な考え方がどのようにして包摂されるかは今後の問題であり、切支丹の問題、また明治以降のキリスト教の移植も、言語の問題、それも言語体系のレベルで問い直してみる必要がある。

この『天地始之事』は、切支丹の再発見の際に外人司祭に手渡されたが棄ててかえりみられなかったと言われる。

II 盤珪禪師の宗教思想

一般に江戸時代は、宗教のおとろえた時代であると言われてきた。だが果してそう簡単に言ってもよいものだろうか。また一般に日本

人は宗教的でないと言われるが、このことも極めて問題であり、この種の考え方には、当然のことながら西欧のキリスト教的神学と、その影響の強かった宗教哲学の立場がかくされている。

江戸時代の仏教思想を考える際に、最も注目されるのは正眼国師・盤珪禪師(1622年～1693年)である。

鈴木大拙氏によれば、日本の禅は道元禅と盤珪禅と白隠禅であると言われるが、道元の只管打座や白隠の公案の組織化に対し、盤珪は一層とらわれない立場で法を説いた。

盤珪禪師は「身どもは仏法もいわず、また禅法もいわず」と述べられ「そうじて、身どもは仏語祖語をひいて、人に示しもしませぬ。ただ人々の身の上のひはんで、すむことでござれば……」と説く。

現在、私たちのよく知っている禅寺院や専門道場に伝えられる禅は宋代以降の禅だが、精神の自由さを考えるためには、高揚した唐代の禅思想について考えることが必要である。

そのためには敦煌で発見された禅文献の整理が必要だったわけだが、それとともに高麗版大蔵經の附録に含まれる初期の禅宗史『祖堂集』の研究も大きくプラスしていることは改めて述べるまでもない。

すでにたびたび述べたことだが、宗教思想においては、人間の持つ自由さ、高貴さを強調するものと、罪意識を強調するものとがあり、それらは理念型としては本覚思想と原罪意識として対比されるが、盤珪禪師の場合はタイプとしては前者の方向である。

パスカルは「人間のみじめさは、人間の偉大さを証明する」と述べたが、盤珪禪師は、人間とは元来^{れいみん}靈明なもので「靈明なるが故に一切の迷のことを習い覚え、靈明なる故に迷い、靈明なる故に悟る」と語られる。

パスカルについて述べたのは、実はこの二人は全く同時代人だからである。盤珪禪師の生れたのは1622年でパスカルの生れる一年前

である。ヨーロッパ史と日本史の並行現象は近年注目されるところだが、盤珪禪師が禪門に入ったのは島原の乱の終結した年で、南蛮屏風や障壁面に残される大航海時代の開かれた時代精神が背景にあることを忘れてはならない。

晩年の説法の中で「身どもがはじめてこの不生の正法（その意味については改めて述べるが）を説き出した頃は、身どもを外道か切支丹のように思いまして人がおそろしがって、一人もよりつきませなんだ」と述べているが、このことは盤珪禪師の教えが極めて独自であったことと、また信徒百万といわれた切支丹のイメージが、当時の人々になまなましく生きていたことを示している。

ところで、盤珪禪について考えてみる際に、いくつかの方法があるが、今回は主としてその教えの無前提性と開かれた立場との関連で、どのように日常言語により教えを説いたかを考えてみよう。

盤珪禪師自身は「身どもは三寸（舌のこと）を使い得たり」と述べられ、また「日本人は漢語につなふござって、漢語の問答では思うように道が問いつくされぬ者でござる、平話で問ばどのやうにも、問れぬという事はござらぬ」とする。厳密には平話の意味はさまざまだが、今日風に言えば、日常言語（Umgangssprache）の意味に解しておくこととしよう。

こう書くと、禪はむしろ言葉による体験の伝達に対し或る種の不信感を持っているのではないかという疑問が当然提出されることだろう。またこのことは、現代哲学の立場からヴィトゲンシュタインやN.R. ハンソンなどから同じく提出される問題だが、盤珪禪師の場合には己れの言語ゲーム（Sprachspiel）に対しては並々ならぬ自信を持っていたことが特徴的であり、このことが盤珪禪を特徴づける大きな特徴となっている。

盤珪禪師の場合、日常言語の使用はその教

義の無前提性とも関係する。

ある僧が禪師に「因縁故事物語りをもして、人の心にさわやかに入りかわるように」説法されてはいかがかと語ったことがある。これは「不生であれ」とのみくり返し説かれる禪師への、当時の僧侶の常識的忠告であったろうが、これに対する禪師の答は予想以上にきびしいものである。禪師は自分は鈍ではあるが、人のためになるのであれば、故事の一つや二つは覚えようと思えば覚えられないことではないが、「其ような事を示すは衆生に毒をくわすようなものにて御座るわいの。毒をくわす事は、まず得しませぬ」と答えられている。

ここでは何等かの教義、何等かのミュース、場合によっては或る種のレトリックは無用のものであり、さらに危険なものと考えられているわけで、このことは禪本来の立場の筈であり、またフロムの言う非権威主義的な立場でもある。

また他の場所で「我宗は自力にもあずからず、他力にもあずからず、自力他力をこえたが我宗でござる」と述べている。

では盤珪禪師は、一体どのような教えを説かれたかと言うことだが、晩年の説法『御示聞書』、これは『盤珪仏智禪師法語』として版本で刊行され、江戸時代にはよく読まれたもので、先ほどの『和論語』や『徒然草』などとともに石門心学のテキストとしても用いられたものである。

念のために、そのはじめの部分からいくつかを引用してみよう。

「禪師衆に示して曰、皆親のうみ附てたもつたは仏心ひとつで御座る。余のものはひとつもうみ附はしませぬ。其親のうみ附てたもつた仏心は不生にして霊明なものに極りました。不生なが仏心。仏心は不生にして霊明なものでござって、不生で一切事がととのひまするわひの。……其不生にして霊明な仏心に極ったと決定して、直に不生の仏心のままで居る

人は、今日より未来永劫の活如来で御座るわひの。」

なお不生の意味と、それが当時どの程度日常言語化していたかは改めて考えることとして、引用をつづけよう。

「仏といふも生じた跡の名でござれば、不生な人は諸仏のもとで居るといふものでござるわひの。不生なが一切のもと、不生なが一切のはじめでござるわひの。不生より始といふ物はござらぬゆへに、不生なれば諸仏のもとで居るといふもので御座る。」

「所で、不生で居れば、最早不滅といふも、むだ事でござれば、身どもは不生といふて不滅とは申さぬ。……不生不滅といふ事は、むかしから経録にも、あそこここに出てござれども、不生の証拠がござらぬ。其ゆへにみな人が、只不生不滅とばかり覚て、いいますれども、決定して不生な事をしませぬわひの。」
「身どもが年二十六の時、はじめて一切事は不生でとのふといふ事を、わきまへましたより此かた、四十年来、仏心は不生にして、霊明なものが、仏心に極ったといふ事の、不生の証拠をもって、人に示して説事は、身どもが初めて説出しました。」

ほんの一部の引用だが、『御示聞書』以外に同時期の説法の寫本がいくつか伝えられているが、それらの主要なものを詳細に比較することにより一層明らかとなる部分もある。

盤珪禪師の法語の面白さは、その平易な独特のリズムとともに、禪師自身の覚醒のプロセスが語られていることである。（その部分の引用は極めて興味のあるものだが、紙数の制約で引用できないが巻末資料のいずれかについて見られたい。）

ところで不生という言葉だが、改めて述べるまでもなく大乘仏教においては重要な基本概念の一つで、簡単に言えば「空」の意味と同じで、般若心経の不生不滅とか真言密教における阿字本不生といったように、当時の人々には慣用されていた言葉であり、それに改め

て重要な意味を与え、他の一切の仏教的な理論言語や専門用語を排して、それを宗教体験の伝達の key-term としたわけである。禪師自身の言葉をかりれば「安居閑閑して、時の人の機を觀じ、化度の手立」を考えた結果であった。

ただ後に心学の手島堵庵が述べるように、盤珪禪師の教えが必ずしも当時の人々にとって、すぐに意図するように解りやすかったとは言にくい。

不生という言葉についても、その存在論的意味に加えて、実存的意味をも持たせたわけだが、そして元来は仏教の基本的言葉にその筈なのだが、それは意図するには理解されにくかったように思われる。

既存の宗教文献への接し方について、侍者であった弟子が「仏典や祖師方の語録を読むことが学道のためになるかどうか」と尋ねたことがある。これに対して「祖録を見るに時節あり、経録の理を頼る時は自眼をつぶす。理を見下す時みれば証拠となる」と答えられている。

禅体験を x 体験一般の中でどう考えるかについて、鈴木大拙氏の意見を一つだけ引用しておこう。同氏は『禅の本質に関する序論』という短い論考の中で「予の意見によると、禅は宗教的意識の極度に高潮したときに出る究竟きうけつの心的事実であって、それが仏教者のうえに起ろうと、キリスト教徒のうえに起ろうと、哲学者のうえに起ろうと、それは偶然の出来事にすぎない。禅の事実となんら本質的必然的關係を有するものではない」とする。

この主張は、プラトンの第7書簡の中での有名な内的覚醒についての説明、またユダヤ教のハシディズムの文献や、イスラムのルーミィの語録などと比較することにより、 x 体験の現われ方として容易に肯定され得ることだろう。

盤珪禪が、公案禪以前の唐代の禪と類似す

る点など、すでによく知られているが、また禅とは言っても度生本意である点など、福音的信仰と共通するものがあり、外来宗教として最も早く移植された仏教が、最終的に、日本化されるとともに、宗教一般の普応性に達した一つの到達点として、そしてまたそれが江戸時代という人類史上の独特な時代にはじめて現われたことに注目することとしよう。

なお一言だけ、見すごされがちな点についてあえて述べておこう。日常言語といっても盤珪禅師の場合、それは文字に書かれたものでなく話す言葉によるものである。禅師自身、音声言語でようやく伝達できるものを、間接的伝聞では伝えられないと述べている。

言葉を記録化することにより科学や思想が生れたが、原体験の伝達の際には話される言葉が必要である。その際には単に音声波以外に他のサイクルの電磁波によりコミュニケーションの場が形成されているわけで、その一部は感覚化されようが、そこにはまたESP (extrasensory perception) 的なコミュニケーションも成立するわけである。もっとも盤珪禅師は他心通を持っているかという問いに対して、「不生で居れば、諸仏の神通の本でござる所で、神通を頼みませいでも、一切の事が調う」と述べているが禅師自身は天眼通などのESP的能力を持っていたことは行業記等により確認できる。

念のためにこのことをつけ加えたのは、 α 体験の伝達において、さらにコミュニケーション一般において、この種のアプローチも必要と感ずるからである。

ところで文字化についてのよく知られる批判は、『莊子』「天道篇」の「君の読む所の者は古人の糟魄（残りかす）已なる夫」という有名な記述である。黄檗希運禅師の「呑酒糟の漢」とか香巖知閑禅師の「画餅無汁」などはよく知られるところだが、「誤謬は図書館にあり、真理は人間の精神の中にある」とするゲーテの主張も同じ方向を示す。

盤珪禅師については、さらに多くの点について述べなければならないが、今回は日常言語による体験の伝達についてのみ考えることにとどめた。盤珪禅は単に禅思想や仏教思想について以上に、今回の問題意識で言えば α 体験自体についての貴重な参考例であり、それを広い視点から捉え直して見ることの意味は大きい。このことは固定化され伝承化される以前の唐代の禅についても言えることであるが、時代も近く資料的により接近しやすい正眼国師・盤珪禅師について考えることの意味は、それが日常の日本語であるだけに、私たちにとっていっそう大きな意味を持っていると言ってよい。

III 金光教の創唱

江戸時代の宗教思想について考える際に、最も興味のある問題は、この時代にどのような創唱宗教が生れたかということである。

今回は、その中から幕末に創唱された金光教について考えてみるが、金光教の教祖金光大神（1814年～1883年）が信奉者に教えたことばの記録『金光大神理解』は、日常言語による宗教体験の伝達の記録として、極めて貴重なもので、昨年（1983年）の新教典の刊行により、その全ぼうが公刊され容易に接することができるようになった。

金光教祖の教えの全ぼうが、今日になって漸く公刊されたのには、さまざまな内的事情もあつてのことだろうが、それ以上に明治以降の天皇制国家の体制では不可能であったからである。

たとえば「伊邪那岐、伊邪那美命も人間、天照皇大神も人間ぞ、それにつきても天子も同じ続き」（市村光五郎の伝え）と言った教えは、戦前は公刊不可能であったろう。なお市村光五郎は明治15年にはじめて金光教祖の下に参じており、教祖の帰幽は明治16年であるので、少なくともその間の教えの記録されたものである。

ところで、多くの場合、新たな信仰体系が創唱されてくるのは転換の時代であり、また個人においては異った価値体系の交さる際である。

日本の近代史の中で、数多くの創唱宗教が生れたのは、幕末と第二次大戦の敗戦の際であったが、前者の典型は天理教と金光教である。この二つは、不思議とその性格が対照的である。前者は創唱者が女性で、世直しの予言者の宗教であり、突然の神がかりから出発するのに対して、後者は男性により創唱され、より内省的であり、時間をかけて信仰が深まって行くと言った経過をとっている。

今回とくに金光教についてのみ述べるのは、先にあげた理由以外に、金光教の場合には、日本人として最初の宗教的自伝『神光大神覚』が残され、その原本は不明だが、二代目取次者による正確な写本が伝えられ、また従来未発表の教祖自筆の『お知らせ事覚帳』が新教典の中に収められ、最晩年までの信仰体験をたどることができるようになったからである。

今回は『神光大神理解』により金光教祖の宗教体験について考えてみるが、日本語で書かれた宗教文献として、その内容の豊かさと平明さ、また信仰の確かさととらわれのなさにおいて、先に述べた盤珪禅師の語録と『神光大神理解』とは出色のものであると考えるが、このことは同書を手にとられれば無理なく賛同されることだろう。

今回の新教典においては『神光大神理解』は三部に分けられる。その第一類は直接に接した信者が自ら聞いた教を書きとどめたもの、第二類は直接の信者の伝えた理解の聞き書き、第三類はすでに出版されたものとなっている。

理解という言葉の説明なしに使ってきたが、この場合の理解とは、村の長が統治者の意向を村民に説明するのを理解と云ったように、神への取次を願った信徒へ教祖神光大神の教えの言葉の意味で、その集成が『神光大神理解』である。

金光教の教祖は生神神光大神であると言った場合に、生神という言葉はかなりわかりにくくなっているが、密教で言う即身成仏という観念を媒介として考えると、わかりやすくなるだろう。今回は伝記的記述は一切省略するが、神光大神は金神に対し42歳の死病を境に、恵の神・愛の神として考えるようになり、さらに最高神として発展して行く。

今回は『神光大神理解』の中から、神観念についてと、福音的信仰との比較のために必要な説明を主として引用することとする。なお念のために追記すれば、福音(エウアンゲリオン)とは、ローマ皇帝についてのよい知らせ、または皇帝から発せられるよい知らせの意味で、それが転用されたものであり、その意味で福音という言葉と理解という言葉とは同種のひびきを持った言葉である。

なお信仰の対象である神名は「金神」から「金乃神」となりさらに「天地の神」となり最終的には「天地金乃神」となる。なお天理教では「神」から「月日」そして「をや(親)」と変って行くが、この種の発展の過程のうかがわれることが、時代も近く記録が大切に伝承されてきた日本の創唱宗教の持つ大きな意味でもある。

なお、神光大神が、農作業を止めて広前(神前)で取次に専念するのは1859年(安政6年)46歳の時からであり、教祖の宗教的信仰の高まりとともに、教祖の神号「金乃神下葉の氏子」(45歳1月)、「金乃神の一乃弟子」(45歳9月)、「金子大明神」(46歳)「金光大明神」(49歳)、「神光大権現」(51歳)と変り最終的に「生神神光大神」(55歳)と変って行く、なお明治になってからの戸籍は、神号を受けつかなかったので神光大陣となっている。

はじめに神観念について引用しておこう。

「祈るところの天地金乃神は、昔からある神ぞ。中古(途中)からできた神でなし」

「村の氏神宮が金神の出社なり」

(以上、市村光五郎の伝え)

「この金神という神は、普請するに『知らずにすれば牛馬七匹、知ってすれば亭主より七墓築かす』と昔しから言い伝えるじゃないか。そのようなむずかしい神なら、頼みがいがあ
る」 (荻原豊松の伝え)

「金神は、崇り神、さわり神、と人は言おうがのう。金神は、幸い神、福の神じゃ」

(近藤藤守の伝え)

「いろいろの神や仏に頼みておかげがあると、言うけれども、おかげのできる本は、天地金乃神のほかにはないぞ」

(島村八太郎の伝え)

「天照皇大神というは、日本の神様であります。天子様の御祖先であります。この神様(天地金乃神)は日本ばかりの神様ではありません。三千世界を御つかさどりなされます神様であります」 (徳永健次の伝え)

「天が下の者はみな、天地乃神様の氏子である。天が下に他人はなり」

(佐藤光治郎の伝え)

「信心すれば、ありがたいことであろう。天に親類ができたのである。何事も教えてくださる」 (難波幸の伝え)

「天地金乃神様は、天地を一目に見とおし、守っておられる。人間は神の氏子である」

「天地金乃神のご神体は天地である。宮社に鎮まり納まっておられるのではない」

(以上二つ福島儀兵衛の伝え)

この種の伝えは他にも多いが、最高神としての遍在について述べられていると言ってよい。

「神様は目にこそ見えないが、そこら辺り一杯におられるので、神様の中を分けて通っているようなものである。」(津川治雄の伝え)といった説明もある。

次に神と人間との関係については、多くの信仰体系と同じく親と子との関係で捉えられるが、この点が金光教の場合一層強調されていると言ってよい。なお名詞に性別がなく単

数複数の明らかでない日本語の場合、親という言葉で、神の父性的面と母性的な面が同時に表現されているわけで、そこには神を父として捉える場合に起り得る神への恐怖の面が緩和されている。この点はカトリックの信仰において聖母崇拜が生れるのと異なる点である。

以下、神と人間との関係について引用する。
「金神を親と思えば、子と思うぞ、親後ろに立っておれば、いかなる悪魔が来ても防いでやるぞ。また、めいめいに子があっても親が守りをしておってみよ。子も、向うから棒を持ってたたきかかってきても、たたかせはすまいがな。」(市村光五郎の伝え)

「五人の子供の中に、くずの子が一人あれば、くずの子ほどかわいいのが親の心。神ものう、不信心の者ほどかわいい。信仰して、おかげを受けなさいよう。」(荻原典松の伝え)

「親は、心配さす不肖な子ほど、ふびんであろう。天地の神様も『神の心を知らずにいる者ほどかわいい』と仰せになる、親の手元へ頼って来る子には、うまい物でもやれるが、『親の手元へ来い』と言っても、何かと逆らい、親を敵のようにして、よそへ出てしまうと、親は『どうしているだろうか』と思って、ふびんになる。親がそうして子をかわいがするのも、天地乃神様が氏子をかわいがってくださるのも、同じことである。」

(後藤光治郎の伝え)

これらのたとえは、『ルカ福音書』15章の放とう息子のたとえや、法華経信解品第4の貧窮子のたとえを連想されるだろう。

またさらに徹底した考え方としては、「金神という神ものう、親見識を出して当たりさわする時分にはのう、神棚のすみへ、押しこまれておったわいのう。神が子に従うようになったら。う。金神様と言うて、様をつけてくれるようになったわいのう。人間ものう、親見識を振り回すとのう、子が言うことを聞かぬわいのう、子に親が従ってゆけばのう、子が親を尊んでくれるわいのう。」

(青井サキの伝え)

さらに『金光大神覚』の中の「立教神伝」とよばれる取次に専念するようにとの召命を記した1859年(安政6年)10月21日の記述には「此方(金光大神のこと)のような実意丁寧神信心いたしおる氏子が、世界になんぼうも難儀な氏子あり、取次たすけてやあてくれ、神もたすかり、氏子もたち行き、氏子あつての神、神あつての氏子、末々繁盛いたし、親にかかり子にかかり、あいよかけよで立ち行く。」とするされている。

元来、神道的な神概念は、神と人との相互依存的な傾向を示すが、ここに述べられるような親子関係は、単に神の子(filius Dei)にとどまらず神の友(amicus Dei)として捉えられていると言ってよい。ヘブライ的信仰では、アブラハムは神の友と呼ばれるが、金光教における神と人間との関係はその意味のより徹底した例であろう。

この種の考え方は、ニーチェの言う要請された無神論やフロイトの退行現象としての宗教批判に対する、有力な反論となると言ってよい。もっともこの種の考えが、「わたしはあなたたちを友と呼ぶ」(ヨハネ福音書15の15)と言われるように、ヨハネ的な信仰の中にあるのも事実である。

信仰の態度については「天地書附」に「おかげは和賀心にあり」と書かれているが、和賀心とは「和はやわらぐで、賀は祝賀の賀である」(角南佐之吉の伝え)と説明される。

この点については「心を広う持つておれ、世界を広う考えておれ、世界はわが心にあるぞ。」(市村光次郎の伝え)とも言われる。

では一体、おかげとはどんな意味なのだろうか。簡単に言えば、それはユダヤ教の考え方に近い。「おかげは長命と出世が、おかげの一等ぢゃ。」(石田友助の伝え)とある。

ただこの種の考え方も、他の信仰体系よりも一層徹底している。

「信心はせんでもおかげはやってある、

おかげは受け勝ち、守りは受け得。」

(市村光五郎の伝え)

「天地の神様のおかげは、世界一杯に満ちている。そのおかげがなければ、空気がないのと同じで、一時も人は生きてはおられない。」

(佐藤光治郎の伝え)

「神のおかげを、目に見られぬもの、と思うな、受けてみよ。見られるもの。」

(佐藤範雄の記述から)

「信心せよ。家業家業で繰り合せをもって繁盛させてやる。何業も良し悪しと、別に選ぶな。そのような狭い道ではない。」

(島村八太郎の伝え)

「おかげを受けてくれば、神も喜ぶ。金光大神の話を聞いて、それでおかげになれば、金光大神も喜ぶ。氏子がおかげを受ければ、神も喜び、金光大神も喜び、氏子も喜ぶ」

(佐藤彦太郎の伝え)

また第3類の「神訓」の中には

「神信心してみかげのあるを不思議とはいふまじきものぞ、神信心してみかげのなき時はこれぞ不思議なること」という説明もある。

この種の立場は、確かにセムの信仰、また多くのインド的信仰とは異質のものであり、この種の立場から、従来の信仰体系を見直してみることににより、忘れられていた視点が見出されてくると言ってよい。

さらにいくつかの引用をつづけよう。

「かわいいと思うところが、そのまま神ぢゃ。」(近藤藤守の聞書および片岡次郎の尋教語録における伝え)の場合のかわいいとは可愛そうの意味だが、「神は愛なり」(ヨハネ第1の手紙4の8)という言葉を連想されよう。

さらに福音書の言葉とも対応するいくつかの理解を引用しておこう。

「人に一つたたかれば、『お手前は手が痛うはなかったかえ』と申して堪忍しておけば二つとたたくことなく、けんかすることなし。」

(鳩谷古市の伝え)

「神様へ物を供えようとする、子がそれを『くれ』と言うたら、子に先にやればよいの、子供が喜ぶ、子が喜べば、神もお喜びになる。」（近藤藤守の伝え）

「鳥や獣がどうして生きているかを考えてみると、神様のお恵みが分かる。冬になったといって、重ね着をするのでなく、夏になっても、一枚脱ぐということもないが、神様は、それで、ちゃんとさしつかえないように育ておられる。」（山本定次郎の伝え）

「あした塩辛を食べるからといって、今日から水を飲んで待つわけにはいきまい、取り越し苦労をするな。」（高橋富枝の伝え）

「ほれるということは、じゃらじゃらしたことのようだが、これは実に結構なことぞ……。神様にも信心して、ほれ込め、実の一心に思い込んでみよ。」（鳩谷古市の伝え）

「これまでは、きれいづく（不汚をいむこと）をする神ばかり。きれいづくをして人は助からず、……。きれいづくのない神は、金神と医者ぞ。」（市村光五郎の伝え）

これらの引用から、金光大神が平田篤胤のように漢訳聖書をも読んでおられたのではないかと考える人もあろうが、それは考えられない。『金光大神理解』の中でキリスト教についてふれるのは一ヶ所で、第2類の中で佐藤範雄が、明治14年の頃、平田篤胤の本を読んで教祖の前でキリスト教や仏教について批判した時に「親は、その子の中でだれかがそしられて、うれしいと思うだろうか。此方の前に来たら他人のことを言うな。他人をそしるのは神の機感（みこころ）にかなわないことになる。釈迦もキリストも黒住も、みな神の氏子である」と述べる部分のみである。

諸宗教の問題については、「天台でも法華でも天地の神様の子でわかれているのである。そばの好きな者や、うどんの好きな者があり、私はこれが好きだ、わたしはこれが好きだと言って、みな好きで立っているのであるから、くさすことはない。」（佐藤光治郎の伝承）と

いった説明もある。

以上、いくつかの引用は『金光大神理解』の中の一部に焦点をあててみたわけだが、金光大神の教えの特徴は、「此方の道は祈念祈禱で助かるのではない。話で助かるのである。」（第3類、佐藤範雄の『内伝』から）であり、「たびたび参られても、何も手から手に渡すものはない。私のは話がおかげであるから、帰られたら話を人にして、おかげをうけさせよ。世の中に他人ということはない。」（堀本利吉の伝承から）と言うこととなる。

金光教祖の帰幽は明治16年であるが、その成立を立教神伝の安政6年1月21日と考え、江戸時代の成立した信仰体系と考えることとした。

なお最後に、教団外では一般に知られることの少ない金光教の教監でもあった注目すべき宗教家の高橋正雄氏は、盤珪禅について次のように述べている。

「私が盤珪さんを喜しく思ふのは、あの人の云はれる事が、全くの日本語であり、その中身も、私の今の身の上、今の気持ちにピタッと来るところにある。あの法話として伝はっている木版本（『御示聞書』のこと）、あれを読むと全くの口語体の説教筆記であって、それを速記して本にしたものだと言われても、ちっともおかしくない程、今の我々に近いもので、二百五十年の歳月がその間に流れ、歴史上の未曾有の時代変化がその間に行はれてい居ると云われることが少しも考へられないのだ。よくも盤珪さんは自分の心持——それもなみなならぬ心持を自分の言葉で云ひ現わしたもので、私は何よりもそれに感心させられる。この人には余程よくわかりぬいていたものと見える。」

この言葉は、『金光大神理解』についても、同じく感ぜられる印象であると言ってよいだろう。

今回は、日常言語による宗教体験の伝達

として、盤珪禪と金光教について引用を主として述べてきたが、そこにはある種の体験、それを今回は x 体験とよんできたが、その種の体験が観念化される際の二つの方向が示されている。

紙面の都合上、比較思想の立場とは言いながら、常に比較される一方の側の引用にとどまったので、『和論語』や『金光大神理解』とヘブライ的文献の比較の際に、それがどれと対応して考えられるかは、省略せざるを得なかった。また盤珪禪師の主張がどのように有神論的立場と対比されるべきか、また不生といった立場が、どのように福音的勧告に展開されるかも省略せざるを得なかった。その点も、本稿が一般向けの著書ではなく、紀要の論考として、紙数の制約以外に、この種問題に知悉している読者を想定するからである。説明不足の点については、参考文献にあげた筆者の関連文献などを参照されれば幸である。

注と引用および参考文献

〈はじめに〉の引用文献

Erich Fromm: "You Shall Be As Gods"
A radical Interpretation of the Old Testament
and Its Tradition, 1966, Holt, Rinehart
and Winston.

日本語訳は、飯坂良明訳、『ヒューマニズムの再発見』1968年、河出書房刊があり、同じ内容で改題されたものが『ユダヤ教の人間観』1980年、河出書房新社から刊行されている。

なお同書においてフロムは x 体験の特徴として次の5つの点を指摘する。

第1は、この種の体験を持つ人は、「人生を一つの問題、つまり解答を要する一つの質問として経験するということである。

第2は、 x 体験には一定の価値秩序がともなうということ。

第3は、 x 的人間にとって、人のみが目的であってあくまで手段でない。

第4に、自己を空しくし、世界に応答し合一し、世界を愛するということ。

第5は、 x 体験は超越的経験であるということ、もっともこの超越が神に向うか否かは観念化の際の問題であるとする。

I 章の引用および参考文献

- (1) 勝部真長著『「和論語」の研究』至文堂刊。1970、同書は研究となっているが、その前篇は本文の活字化されたもの。後篇は解説である。
- (2) Robert N. Bellah "Tokugawa Religion—The Values of Pre-Industrial Japan" 1957, Free Press.
- (3) 田北耕也校注「天地始之事」は『日本思想体系25巻』『キリシタン書・排耶書』1970年、岩波書店刊に収められている。
- (4) 洪水伝説と文化のタイプとの関係については「本覚論考」『哲学論集13号』1984年、上智大学哲学会編の筆者の論考を参照されたい。

II 章の引用および参考文献

盤珪禪師についての基本的文献として活字本として入手容易なものは、鈴木大拙編校『盤珪禪師語録』1931年、岩波文庫、戦後一部訂正の新版がある。

最も包括的なものとしては
赤尾重治編『盤珪禪師全集・一冊』1976年、大蔵出版刊

最も厳密なものとしては
藤本槌重編『盤珪禪師法語集』1971年、春秋社刊がある。

伝記や思想面で重要なものは
鈴木大拙著『盤珪禪』と『盤珪の不生禪』いずれも『鈴木大拙全集・第一巻』1968年、岩波書店刊所載

藤本槌重著『盤珪国師の研究』1971年、春秋社刊がある。

その他については全集所載の解説について見られたい。

なお、今回の日常言語と宗教体験の伝達の問題については「盤珪禪師の宗教思想——日常言語による宗教体験の伝達」『哲学論集、8号』上智大学哲学会編、1979年刊でより詳しく論じた。

III章の引用文献と参考文献

* 基本的文献は

『金光教教典』金光教本部教庁編，1983年10月刊であり，その中には「金光大神御覚書」「お知らせ事覚帳」「金光教大神理解 1 類～3 類」が含まれている。

* 入手容易なものとしては抄録であるが「金光大神理解(抄)」『日本思想大系第67巻，民衆宗教の思想』1971年，岩波書店刊がある，同書には「金光大神覚」も収められている。

今回は全くふれなかったが，伝記的な資料としては，金光教本部教庁編，『金光大神』1953年刊がある。同書は詳細な網羅的なものである。

* 創唱宗教についての筆者の考え方については 林知己夫・米沢弘『日本人の深層意識』 (NHKブックス) 1982年，日本放送出版協会刊の第4章「内なる心の目覚め——創唱宗

教の誕生からみて」を参照されたい。

なお創唱宗教とは一人の創唱者により述べられた宗教的体験を中心に教団が形成され教義や組織のとのえられて行く宗教のことで，歴史的に仏教もジャイナ教も，キリスト教もイスラムも創唱宗教で，日本では，天理教，金光教などがその例である。日本の創唱宗教について考えることは，時代も近く資料も整備されているので，この種の問題を考えるために極めて重要である。

なお，同書の第3章「日本人の宗教的態度」においては， α 体験の種々相について述べたのであわせて参照されたい。

* 高橋正雄氏の引用は，照峰馨山著『盤珪の日本禅』1941年，丁子屋書店刊の跋文から。

(1984年9月25日受付)